

Title	京大広報 No. 576
Author(s)	
Citation	京大広報 (2003), 576: 1407-1420
Issue Date	2003-02
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2433/196527">http://hdl.handle.net/2433/196527</a>
Right	
Type	Others
Textversion	publisher



# 京大広報

No. 576

2003. 2

## 目次

### 大学の動き

- 第5回運営諮問会議の開催.....1408  
人権週間に因む研修会の開催.....1411  
外国人研究者との交歓会の開催.....1412  
国立大学の法人化に関する  
説明会（第2回）の開催.....1412  
自衛消防団員に感謝状授与.....1412  
平成15年度入学者選抜学力試験  
（第2次学力検査）の期日等.....1413  
平成15年度入学者選抜学力試験  
（第2次学力検査）の志願状況.....1414

### 寸言

「環」をもって貴しとなす 森井清二.....1415

### 随想

黄泉よりの生還 名誉教授 谷 嘉明.....1416

### 洛書

どこで危機管理を学んだのか？

河田恵昭.....1417

訃報 .....1418

### 医療技術短期大学の動き

平成15年度医療技術短期大学部

入学者選抜学力試験の実施.....1419

日誌 .....1419

### お知らせ

高等教育教授システム開発センター

第9回大学教育改革フォーラム

「高等教育における教育改革と経営改善」.....1420

編集後記 .....1420



京都大学広報委員会

<http://www.kyoto-u.ac.jp/>

## 大学の動き

### 第5回運営諮問会議の開催

第5回運営諮問会議が平成14年7月26日（金）に事務局特別会議室において、石井米雄委員、伊東光晴委員、井村裕夫委員、大南正瑛委員、大西正文委員、興膳宏委員、佐藤禎一委員、竹内佐和子委員、館 糾委員、野依良治委員の出席のもと、開催された。

なお、運営諮問会議の目的については、『京大広報』No.558（2001.6）もしくはホームページ（<http://www.adm.kyoto-u.ac.jp/GAD/pid/simonkaigi.htm>）に掲載している。

#### 運営諮問会議委員

石 井 米 雄	神田外語大学長
伊 東 光 晴	日本学術振興会学術顧問
稲 盛 和 夫	京セラ（株）名誉会長
井 村 裕 夫	総合科学技術会議議員
大 南 正 瑛	京都橘女子大学長
大 西 正 文	大阪ガス（株）相談役
興 膳 宏	京都国立博物館長
佐 藤 禎 一	日本学術振興会理事長
竹 内 佐和子	東洋大学経済学部教授
館 糾	鐘淵化学工業（株）相談役
野 依 良 治	名古屋大学大学院理学研究科教授
榊 本 頼 兼	京都市長
松 本 和 子	早稲田大学理工学部教授
は委員長（敬称略・50音順）	

（任期：平成14年4月1日～平成16年3月31日）

#### 主な意見

「京都大学の基本理念」が定められているが、この理念では京都大学の特色というものが明確に出ていない。他の国立大学とは違う理念・特色があってもよい。

国立大学入試の複数受験化問題の際、東京大学はどのような学生を養成するのかとの問いに対し、当時の総長が野球の打者に例え、「東京大学は3割打者の養成を目指している」と答えたことがある。この表現を借りれば、京都大学は東京大学と



は違い本塁打打者か三振打者を養成する大学と言える。

人文社会科学の点からいえば、フィールドワークは京都大学の伝統的な分野である。知識の量を誇るのではなく、新しいものへの発見に対する意欲・取り組みが京都大学の強みであり、このことが世界的にも評価されている。また、京都大学の東洋学は、良い意味で東京大学への対抗心をエネルギーにして新しい学問を創造していたところがある。このような気迫を持っていないと京都大学独自の学問というものは育たないと思う。

京都帝国大学初代総長の木下広次先生が、最初の開学の挨拶で「京大は東大の支校にあらず」と語っているように、創設当初から、東京帝国大学とは全く違う大学を創るという意気込みが表われていた。また、京都帝国大学設置の際、法律に、「規模は東京帝国大学の3分2」と決められたが、以後100年間、京都大学は東京大学のアンチテーゼとして頑張ってきた。ただ、現代では国際化、グローバル化が非常に進んできており、国際競争が激しい。先ほどの野球に例えて表現すると、本塁打を日本国内で打っているだけではだめであり、海外の大リーグに行っても打てるようにならないといけない状況になっている。その本塁打どのようにすれば打てるようになるかというのが京都大

学の大きな課題であろう。

昭和32年頃、京都大学には桜田一郎先生、湯川秀樹先生など、当時の中高生にもよく知られている教授陣があり、それに憧れて入学したものである。中高生が憧れる教授たるものが京都大学の教授といえるのではなかろうか。今では情報発信の問題もあり、なかなかそういう教授陣が見あたらない。当時と見比べると先生の格が小さく、存在感のある教授陣が少ないのではないか。教授陣の格というものを上げるよう努力して欲しい。

そのためには、評価方法を相対評価ではなく絶対評価にすべきであると思う。今回の21世紀COEプログラムでもそうだが、サイエンスだけで評価すれば良いのであって他のファクターは無い方がよいと思っていたが、結果は研究・教育、社会貢献、国際交流といった評価項目がたくさん挙げられ、客観性の高い評価が良いということになってしまった。本当の評価はそうでは無いと思う。しかし、そういう評価をどうすれば適性にできるかというのが非常に難しい問題である。

大学の中の世界から議論する観点と、世界の変革の中で今の日本が置かれている状況はどういうものかといった、外部からどのように見るかという観点も重要だと思う。もっと社会に直接的に目をむけることが大切である。EU統合化時に感じて感じたことは、学問というのはその地域地域に最大限適応するかどうかが重要であり、そういう学問をしっかり持ちながら社会に貢献すること、国に対する貢献ではなくて社会そのものに対し直接的に貢献することにより、国境の壁が無くなり全ヨーロッパ的なものが構成されていったという印象を持った。21世紀においては、それぞれの地域が持つ力、より新しいローカルな姿という目指していくことが重要である。

昔は産業のための学問であったが、今や産業の

ための学問ではなく、次の時代の学問、つまり社会の問題をそのまま解決していくというようなスタンスが必要なのではないかと思う。京都大学は時代の変わり目というのを意識しているということでは非常に確かである。環境問題など社会的に見て早急に解決してもらいたいことがたくさん発生している状況から、その緊急性というところにもっと目を向けてゆく必要があると思う。

EU統合に伴い、ヨーロッパの大学では共通システムでの学位交換の検討が進められている。このことについては、それぞれの国の文化、言語があり、批判的な意見もあるが、現実問題としては、特にアメリカの大学との互換という実際上の必要性に引きずられ、どんどん統合的な取り扱いが進んでいる。アメリカモデルが世界標準となることは嫌だとも言ってはおられなくなる可能性がある。京都大学の研究活動を考えていく場合、このような世界的な流れの中でどういう位置づけを担っていくのかを抜きには考えられなくなる。

京都大学は設置の経緯から見ても国策として創られた大学であり、世界を目指していただきたい。他の国立大学や国公立を含めた全ての4年制大学と同じような枠の中で内向きな論議をするのではなく、やはり抜き出るところはどんどん抜き出していくことが必要だと思う。そのためにいくつかの提案をしてみたい。

一つは、京都大学は研究大学として学部を持たない独立大学院になるべきということ。法人化になれば大学の運営費交付金は学生数によることとなり、学生数が減れば運営費交付金が減るという意見もあるが、国策として研究者養成、高度専門人材養成の役割を大きく持つという大学を目指すべきだと思う。これを例えば、5年から10年ぐらいのスパンの中で考えてはどうか。また、学部と大学院が連結している日本のシステムの中では、大学院生を囲い込むことがある。そうならないためにも、独立大学院となり、全国の研



究能力のある学部学生を入試によって採用するというのを積極的にやればよい。意欲ある研究能力の高い学生を学部と直結しないシステムで果たして確保できるのかという懸念もあると思うが、全国でネットワークを組み、私学を含めてどんどん優秀な学生を集めてくる。そうすれば、私立大学もそれに対抗して切磋琢磨することにもなると思う。

もう一つは、京都大学というのはいわばたくさん専門を持っている。しかしどの専門が本当に優れているのかについて京都大学自身がきちんと点検していない。何となく京都大学ブランドというのがあるというように京都大学内でも思ってしまう、また周囲も納得してしまっている。日本国内における評価方法は国際水準からみて評価の質が問われていることことから、外国の様々な大学評価機構へ研究内容を積極的に提出し、評価を受けるべきだと思う。中央教育審議会の議論でも、外国で評価されたことはそれは評価として文部科学省も認めていこうという議論になっている。2004年に迫ってきた法人化を受け身としてとらえるのではなくて、1つの大きなターゲットの中にもうまくそれを組み込んでいくということを実施すれば面白いのではないかという感じがする。

法人化に際しての一番の問題は財政をどのように確保するかである。現在、大学の研究予算は12～13の国立大学で全体の約70%を使っている状況である。これはこれまで研究ポテンシャルの高いところに集中して配分されているという実態である。法人化にあたり、評価によって新しい予算配分の形を創り上げたとした場合、財政措置が平準化してくることが予想され、今まで通りの予算が維持できるかどうか心配である。それで本当に大学の研究というものが支えられるのが懸念される。そうならないためにも、研究というものに特化した予算措置について、大学側からの強い要求や研究所群からの新しい声・考え方が出てくることを期待している。

数値的なもので評価を行うとなると、やはり平準化の問題が出てくる。ランキングというのは、もともと「格」でありボーダーではないはずである。ところが数値のみで評価をすると順番がついてしまう。大学の評価というものは論文の数を何本というものでなく、やはり、存在感、ビザビリティであると思う。京都大学の格というものを何をもって表すのかを主張しない限り、京都大学は単なる全国で何番目の大学ということになってしまう。やはり京都大学というのはいちばんとした格を持った大学であってほしいと思う。

シカゴ大学の物理学教室が卒業生のサーベイをしたことがある。ノーベル賞を初めとする世界的なアクティビティのある卒業生を調べてみると、「生みの親」から早く離れた学生の方が伸びが著しいというものであった。つまり、あまり囲い込みをしないということである。「生みの親」がおり、そして「育ての親」がいる。学生はそういう形でどんどん階段を上っていくのだということである。このような役割を持つ大学が相乗的に世界の中にあることが良い。それが非常に多角的で多様な世界の知的状況を生み出しているのだと思う。学部と大学院とは必ずしも同じ所へ行くとは限らないという状況を作ることによって学生の意識も変わるということもあるのではないか。

現在、学問というものが非常に大きな変革期に来ており、新しい学問分野が今後益々発展していくと思う。こういう状況の時こそ京都大学がいかにあるべきかを真剣に考えることが非常に大事である。新しい学問分野が創出されるような大学の雰囲気、組織というものを創っていく必要があるとともに、そういう学生が育つような大学であって欲しいと思っているが、それをどのように具体化するかは非常に難しい問題である。

最近、ロースクールの在り方が問題となっているが、学部においてロースクールのための塾通いが行われるのではないかという懸念も生じている。

やはり学部学生のうちにいかに幅広くいろいろなことを勉強する機会を与えるかが非常に大切であると思う。学部の中では文学部で勉強したり、あるいは工学部での技術の勉強をしたり、いろいろな分野を学んできた学生が大学院で法律の勉強をして法曹になってほしいと思う。大学院大学にしてはどうかという意見もあり、確かにそれは1つの選択肢ではあると思うが、アメリカの有名な大学も学部を持っており、しかもアーツ・アンド・サイエンスであって分化はしていない。そのことがアメリカの大学の強みじゃないかなという気がする。

また、京都大学では、ビジネススクールも検討

されていると聞いているが、このような状況から、大学院というものが研究者育成型大学院と専門職養成型大学院に分かれていくのではないかと考えている。京都大学は両方持たなければいけないと思うが、そういう中で学部教育をどうすべきかというのは今非常に大きく問われているのではないかと考えている。

## 人権週間に因む研修会の開催

平成14年12月6日（金）午後3時から、附属図書館 AV ホールにおいて、「人権に関する研修会」が開催され、山崎高哉同和・人権問題委員会委員長の開会挨拶の後、約1時間30分にわたり、本学教職員・学生約90人の参加者が熱心に聴講した。

本研修会は、学内外から講師を迎え、本学教職員・学生を対象として同和・人権問題の啓発を図る目的

で毎年、春と秋に2回開催している。今回は、弁護士岡村久道氏（大阪：岡村・堀・中道法律事務所）を講師に迎え、インターネットに代表される最近の情報化社会における様々な人権トラブルなどをご自身の体験をまじえながら、「情報と人権 - 情報倫理と法 - 」というテーマで講演が行われた。講演要旨は後日掲載の予定である。



## 外国人研究者との交歓会の開催

毎年恒例となっている総長主催の「外国人研究者との交歓会」が平成14年12月16日（月）午後6時より京大会館において開催された。この交歓会は、本学において教育、研究に従



事している外国人研究者と総長をはじめ本学教官とが交流を深めるよい機会となっており、当日は雨模様の悪条件にもかかわらず総勢280人の出席者を得、長尾 真総長の挨拶、外国人研究者を代表して農学研究科の Dr.Wolfgang Kraus 氏の挨拶に引き続き、塩田浩平総長補佐の乾杯の発声で始まった。会場は立錐の余地もないほどの賑わいをみせ、懇談の輪が広がるにつれ、熱気につつまれた会となり、盛会のうちに午後8時に閉会した。

## 国立大学の法人化に関する説明会（第2回）の開催

平成14年12月20日（金）12時20分から、工学部8号館3階大会議室において、教職員及び学生を対象として国立大学の法人化に関する学内説明会（第2回）が開催された。

最初に、長尾 真総長から国立大学を巡る現状、特に文部科学省、国立大学協会の動きについて概要説明があった。続いて、森本 滋総長補佐、西本清一総長補佐から本学における検討状況と今後の課題について説明が行われた後、質疑応答が行われた。

今回の説明会には200人を超える参加があり、また学内向けにインターネット放送も行われた。



## 自衛消防団員に感謝状授与



平成14年12月26日（木）午後4時30分から事務局棟5階大会議室において、自衛消防団員に対して総長からの感謝状及び記念品が本間政雄事務局長より贈呈された。

この日感謝状を受けた団員は、向江勝一（法学部）、牧 良光（経理部）、松下裕之（総合人間学部・人間・環境学研究科）、頓宮 拓（化学研究所）の各氏である。

なお、当日午後3時から自衛消防団による演習が行われ、日頃の訓練成果が披露された。

## 平成15年度入学者選抜学力試験（第2次学力検査）の期日等

平成15年度入学試験（第2次学力検査）を、次の予定で実施する。

## 前期日程試験

月 日	教 科 等	学 部	時 間
2月25日 （火）	国 語	総合人間「理系」・理・医・薬・農	9時30分～11時
		総合人間「文系」・文・教育・法・経済「一般」	9時30分～11時30分
	数 学	総合人間「文系」・文・教育・法・経済	13時 ～15時
		総合人間「理系」・理・医・薬・工・農	13時 ～15時30分
2月26日 （水）	外 国 語	総合人間・文・教育・法・経済「一般」・理・医・薬・工・農	9時30分～11時30分
	論 文	経済「論文」	9時30分～12時30分
	地 理 歴 史	総合人間「文系」・文・教育・法・経済「一般」	13時 ～14時30分
	理 科	総合人間「理系」・理・医・薬・工・農	13時 ～15時30分
	論 文	経済「論文」	14時 ～17時

## 後期日程試験

月 日	教 科 等	学 部	時 間
3月13日 （木）	数 学	総合人間・教育・経済・農（食料・環境経済学科）	9時30分～11時30分
		理・医・薬・工（地球工学科，建築学科A・B選抜，物理工学科，工業化学科）・農（資源生物科学科，応用生命科学科，地域環境工学科，森林科学科）	9時30分～12時
	論 述	工（電気電子工学科）	9時30分～11時30分
		工（情報学科）	9時30分～12時
	国 語	総合人間・文・教育・経済・農（食料・環境経済学科）	13時30分～15時30分
	理 科	工（建築学科A選抜） 物理のみ	13時30分～15時
		理・医・薬・工（地球工学科，工業化学科）・農（資源生物科学科，応用生命科学科，地域環境工学科，食料・環境経済学科，森林科学科）	13時30分～16時
	論 文	工（物理工学科）	13時30分～16時
3月14日 （金）	実技・論述	工（建築学科B選抜）	13時30分～17時30分
	面 接	農（食品生物科学科）	9時30分～11時30分 13時30分～16時30分
	外 国 語	総合人間（独・仏・中国語）・文・教育・法・経済・医・工（工業化学科）・農（資源生物科学科，応用生命科学科，食料・環境経済学科，森林科学科）	9時30分～11時30分
		総合人間（英語）	9時30分～11時50分
	面 接	工（物理工学科）	9時30分～12時30分 13時 ～16時30分
		工（建築学科B選抜，電気電子工学科）	13時 ～17時
		工（建築学科A選抜）	13時 ～18時
	論 文	文・教育・医・薬・工（工業化学科）	13時 ～15時
		法	13時 ～15時30分
	口 述	工（情報学科）	13時 ～17時
	面 接	農（食品生物科学科）	9時30分～11時30分 13時30分～16時30分



## 平成15年度入学者選抜学力試験（第2次学力検査）の志願状況

志願票の受付は、1月27日（月）から2月5日（水）までの間に、各学部で行われた。

学部別の入学志願者数は、次表のとおりである。

学 部			募集人員	志願者数	倍 率	(参考)昨 年 度			
						募集人員	志願者数	倍 率	
総合人間学部	前期	文系	110 <sup>△</sup>	468 <sup>△</sup>	4.3	110 <sup>△</sup>	401 <sup>△</sup>	3.6	
			55	234	4.3	55	180	3.3	
			55	234	4.3	55	221	4.0	
	後期		20	380	19.0	20	371	18.6	
文 学 部	前期		190	592	3.1	190	582	3.1	
	後期		30	390	13.0	30	417	13.9	
教 育 学 部	前期		40	138	3.5	40	156	3.9	
	後期		20	137	6.9	20	171	8.6	
法 学 部	前期		320	893	2.8	320	835	2.6	
	後期		20	388	19.4	20	437	21.9	
経 済 学 部	前期	一 般 論	210	839	4.0	210	943	4.5	
			160	534	3.3	160	623	3.9	
			50	305	6.1	50	320	6.4	
	後期		20	560	28.0	20	726	36.3	
理 学 部	前期		271	956	3.5	271	956	3.5	
	後期		30	1,105	36.8	30	1,208	40.3	
医 学 部	前期		90	440	4.9	90	467	5.2	
	後期		10	196	19.6	10	230	23.0	
薬 学 部	前期		70	307	4.4	70	276	3.9	
	後期		10	201	20.1	10	195	19.5	
工 学 部	前期		857	2,184	2.5	857	2,476	2.9	
			98	888	9.1	98	952	9.7	
	地球工学科	前期	166	401	2.4	166	458	2.8	
		後期	19	246	12.9	19	283	14.9	
	建 築 学 科	前期	72	236	3.3	72	281	3.9	
		後期	8	95	11.9	8	84	10.5	
			A選抜	4	54	13.5	4	48	12.0
			B選抜	4	41	10.3	4	36	9.0
	物 理 工 学 科	前期	211	494	2.3	211	671	3.2	
		後期	24	190	7.9	24	224	9.3	
	電気電子工学科	前期	117	319	2.7	117	263	2.2	
		後期	13	103	7.9	13	95	7.3	
	情 報 学 科	前期	81	197	2.4	81	231	2.9	
		後期	9	84	9.3	9	86	9.6	
	工 業 化 学 科	前期	210	537	2.6	210	572	2.7	
		後期	25	170	6.8	25	180	7.2	
農 学 部	前期		233	665	2.9	233	753	3.2	
			67	818	12.2	67	954	14.2	
	後期	資源生物科学科	19	148	7.8	19	197	10.4	
		応用生命科学科	9	106	11.8	9	148	16.4	
		地域環境工学科	11	226	20.5	11	161	14.6	
		食料・環境経済学科	9	106	11.8	9	182	20.2	
		森 林 科 学 科	12	194	16.2	12	189	15.8	
		食品生物科学科	7	38	5.4	7	77	11.0	
合 計			2,716	12,545	4.6	2,716	13,506	5.0	
	前期	2,391	7,482	3.1	2,391	7,845	3.3		
	後期	325	5,063	15.6	325	5,661	17.4		

《注》法学部（後期日程）と経済学部（後期日程）は、外国学校出身者のための選考の募集人員20名以内と10名以内とを除く。

## 寸言

## 「環」をもって貴しとなす

森井 清二

昭和20年8月15日、戦争が終わった。当時、大阪工業専門学校（現大阪工業大学）の三回生であった私は、9月末で繰り上げ卒業となり京都に帰ることとなった。

しかし、帰ってみると、唯一戦災を免れた大都市、京都の人でさえ、目標を失い、虚脱状態にある。そうした時にたまたま耳にしたのが、大学入学の受験資格が大幅に拡大されるという話であった。思えば、工専で実際に勉強したのは一回生の間だけである。二回生の1年間は勤労動員で戦闘機「紫電改」製造の一端を担い、三回生で復学したものの今度は空襲に追われ続けて、授業を受ける暇も無く繰り上げ卒業した身である。このままではとても電気を専攻したとはいえない。「大学でもう一度電気を勉強したい」という思いがこみ上げてきた。

受験生が急増するなか、幸いにも入学試験に合格し、戦後最初の新入生として工学部電気教室の一員になることができた。級友の出身は、旧制高校、工専、陸士、海兵とまちまちである。年齢も上から下までほぼ10歳の開きのある特異なクラスであった。しかし、ともに死線を越えてきたという思いからか、友情でつながった環は強く、今も毎年クラス会で顔を会わせている。

大変な食糧難のもとでの入学であった。教授陣は、京大の学風というか「基礎を身につけ、研究の仕方を学べば、後は各自が考えれば良い」というスタンスで臨まれる。これに甘え、一同食糧調達に大いに精を出した。しかし、どうしても埋められない飢餓がもう一つあった。開戦前夜から、一切米英の文献が入手できなくなり、外国の研究動向が全くつかめなくなっているという情報飢餓である。

卒業研究のテーマは高周波誘導加熱であった。その将来性に着目されていた阿部 清教授のご指導のもと、誘導加熱用発振装置を試作し、研究をさせて頂いた。しかし、邦文文献がほとんど無い。進駐軍が、米国の現況を日本人に知らせるため大丸デパー



ト西側に開設していたクルーガー図書館を大いに利用させてもらったものである。

私の誘導加熱研究の狙いは、材木の乾燥や合板の接着、プラスチックの硬化等にこの原理を用いることができないか、ということにあった。まさかこれがのちに電子レンジとなって、各家庭の必需品になるとは思ってもみなかった。米国で、P・スペンサー博士が、マイクロウェーブの照射実験でポケットに入れていたキャンディーが溶けていたのをヒントに、電子レンジの製造に成功したのは、昭和20年代末のことである。

日本でも昭和36年に初めて電子レンジが発売されている。しかし、一般家庭に普及しだしたのは、メーカーの冷凍技術が発達し、冷凍車が自由に走り回り、各家庭に冷蔵庫が整い、巷に冷凍食品が溢れるようになった昭和50年代以降のことである。つまり家庭で誰もが好きなときに食事ができるよう、製造・流通・貯蔵・消費という大きな環がシステムとしてつながって、初めて電子レンジは爆発的に普及したのである。

今日、将来性のあるビジネスとして介護や環境ビジネスが喧伝され、ぼつぼつ目新しい製品やサービスが出始めている。しかし、バイオの中でも既存の製薬ビジネスが組み込まれているシステムを直接活用できる場合等は別として、これらの新しいビジネスにはシステムとして完結したものがまだない。例えば特定の能力で画期的な介護ロボットが出現しても、それだけで直ちに誰もが求めるとは思えない。介護をする人・される人が切望しているサービスを満足させるシステムがクローズし、その構成部分としてロボットが有効に働くようになって初めて、爆発的に普及するのである。とはいえ、新しいシステムのどこが欠落しているのか、どうすれば環が完結するのかが判れば、システムを構成する総てのビジネスに飛躍的な発展が期待できるので、ビジネスチャンスは無数にあるといえるであろう。

（もりい きよじ 関西電力(株)顧問，昭和24年工学部卒）

## 随想

## 黄泉よりの生還

名誉教授 谷 嘉明

私はあの時、確かに死んでいた。近年、血圧が高くなり、とくに降圧剤を服用していたのだが次第に不整脈がひどくなり、失神して椅子から倒れ落ちたことが3回ほどあった。大学の勤務も停年が近づくとつれてスケジュールが過密になる。如何に丈夫な者でも生身のことゆえ必ず病気になる。平成10年3月末お蔭様で健康のうちに停年退官し、4月4日の退官記念祝賀会が終わってすぐ下関入りし翌5日の東亜大学の入学式に出席し、その日のうちに京都に舞い戻り、翌6日には京都大学名誉教授の称号授与式に出席し、また下関に帰ると言った具合で、考えると無茶苦茶なスケジュールである。不整脈は確実にひどくなってきた。そこで、紹介を受けて洛陽病院心臓センターに検査入院した。停年1年後の7月23日である。

診察の結果、心カテ検査するまでもなくペースメーカーを植込みましょうという事になった。不整脈は益々ひどくなり、R-R 間隔は段々長くなり、遂に植込み3日前には15秒の心停止が出た。勿論失神した。この時ほど手術が待遠しく感じられたことはなかった。8月9日手術、術前注射(多分ラボナカ)が効いて手術台の上で眠くなるのを堪えるのが辛かった。時々医師が痛くないですかと尋ねてくるので、その返事をしなければならぬからである。先ず右側鼠頸動脈から予備の電極リード線を心臓に打込んだ後、左鎖骨直下を切開しポケットを作る。これらは全てキシロカイン局所麻酔下で行われる。よく効くものである。X線撮影を見ながら、2本のリード線を心房と心室壁に打込むのであるが、リード線が血管の中を通ってうまく心臓に届くものだと感心した。リード線の先端に釣針の戻りのようなステントが附いており、刺入して少し引くとそれが開いて抜けなくなって固定される。私のペースメーカーはドイツのBIOTRONIK社のACTROS DRと



いう型で、小さく薄型になっている。R-R 間隔が1秒より長くなればセンサーが作動してパルス電流が流れるようになっている。自分の心臓が正常に打っているときは休止しているという優れものである。Medical Engineeringの進歩には感嘆させられる。最近リチウム電池が使用されており、消耗少なく10年位は電池の交換は不要とのことである。

ペースメーカーを埋め込んで先ず感じたことは、呼吸が大変楽になった。少々の階段を歩いて登っても息切れがしない。以前よりも元気になった。今まで医術の恩恵を身に沁みて感じたことはなかった。有難いことである。確かに私はあのとき一度死んでいた。それがペースメーカーのお蔭で命が蘇り元気になった。今は2度目の人生である。神様から戴いたオマケの生命であると思っている。それだけに大切に生きようと思っている。術後1年頃から時々声が小さく弱々しくなることがある。最近耳鼻科に受診したところ、声帯軟骨についている軟部組織が少し萎縮して、イーとかエーとか発する時に少し隙間ができて空気が漏れるからであるとの事で加齢変化の一つであり、大声で発声することがよいとの宣託を受け、現在発声のリハビリのためにカラオケに励んでいる。毎週月曜日の午後新下関の家に入り、夕食はダウントウンに出て魚を喰うことにしているが、その後、公認でカラオケを唄いに行くというスケジュールになっている。もとより嫌いではないことなので一段と気が入り、リハビリの効果を上げている。

(たに よしあき 元生体医療工学研究センター教授、平成10年退官、専門は歯科生体材料学)

## 洛書

## どこで危機管理を学んだのか？

河田 恵昭

1998年7月にパプアニューギニアでマグニチュード7の地震が発生した。断片的に得た情報では、どうも津波による大きな被害が出ているとのことであった。この地震は現地の金曜日の夕方に起ったた



めに、すでに災害担当官庁の退庁時間も過ぎており、かつ首都のポートモレスビーから北西におよそ400km離れた辺境の地で発生したこともあって、なかなか情報が入手できなかった。しかし、週明けに、周辺のオーストラリアなどから少しずつ被害情報がインターネットでわかるようになってきた。とてつもない大きな津波が襲ったということであった。

国内の研究者らと相談し、調査に行くべしという結論に達し、当時の文部省に突発災害調査費を申請する一方、世界の津波研究者に国際共同研究の呼びかけをメールで一斉に行った。東京の同国大使の信任状と入国ビザを申請する一方、熱帯地域の遠征につきものの伝染病対策、被災国研究者との共同研究体制の確立などの困難を克服して何とか首都のポートモレスビーに辿り着いたときには、すでに災害後1週間を過ぎていた。

さて、前進基地のウエワクまでは飛行機で行けるがそこから直線距離にして180km西のアイタペまで足がないのである。しかもアイタペには泊まるどころもないのである。未舗装の地帯が一本あるが、途中、横断する32箇所の川に一本も橋がかかっていないのである。日本、米国、オーストラリア、パプアニューギニアからなる20名に達する国際隊の総隊長に私が就任し、被災地にどうやって行くのか、どこで寝泊りするのか、各国の調査分担をどうするのか、調査後の報告書のまとめ方などについて一夜ブレインストーミングをやり、隊員全員の同意を得てゴーのサインを出した。

いざ、出発という朝、被災地調査隊長を予定していた隊員が発熱して、現地入りが危険なため後方支援に回り、私が彼の代役を果たすことになった。そ

して、国際赤十字の救援ヘリコプターに私を含む先遣隊3名を乗せていただき、真っ先にアイタペに入った。現地の救援軍の指揮官と禁止されている被災地調査の許可を得る交渉を始めた。そこからさらに30km離れた被災地では疫病が蔓延し、無人と化しており生き残った犬が群れとなって行動し、危険との話で、交渉は難航を極めた。これについては、調査後、私と米国人教授が現地住民に「津波は自然現象である」という講義をするという交換条件で調査が許可された。しかし、住民はカヌーで行き来している土地であるから、毎日ヘリコプターでしか被災地に入れないのである。津波で被災地住民の1/4に当たる2,500名が犠牲になったことや、15mの高さの津波が来襲したことも調査結果から判明した。

さて、現地調査の苦労話を紹介するのが本小文の目的ではない。このような現地調査法を含む危機管理をどこで学んだのかということを言いたいのである。もちろんこのような講義は本学はもとより全国のどの大学でも開講されていない。では、どうして身に付けたかかというと、学生時代に一心不乱に山に登り続けたワンダーフォーゲル部時代の経験が基礎となっているのである。私は早くから研究者になることを目指して勉強していたわけではない。学生当時、大学に行くと、真っ先に当時の西部講堂横のクラブ長屋のボックスに寄るのが日課であった。この津波災害の翌年起的トルコや台湾の地震災害調査をはじめ、9・11ニューヨーク同時多発テロ事件の対応に関する調査団の団長として、大学研究者、政府機関、国連の関係者などを引率して調査したが、そこで問われるのは強いリーダーシップであった。自分が望んで身に付けた暗黙知ではないが、こうして自分の研究に役立つとは考えても見なかった。学生時代に何かのにめり込み、たとえそれが将来の職業の役に立つ見込みがなくても、そこから得られることが結局多いというのが私が得た結論である。

(かわた よしあき 防災研究所巨大災害研究センター教授)



## 訃報

このたび、<sup>たかぎ こういち</sup>高木興一名誉教授、<sup>やまだ はじめ</sup>山田肇名誉教授が逝去されました。

ここに、謹んで哀悼の意を表します。

以下に両名誉教授の略歴、業績等を紹介します。

## 高木 興一 名誉教授



高木興一先生は、平成14年12月29日逝去された。享年66。

先生は、昭和38年京都大学工学部を卒業、同大学大学院で学ばれた後、同大学工学部助手、助教授を経て、平成2

年工学部教授に就任、衛生工学科環境衛生学講座を担当された。平成8年より、京都大学大学院工学研究科環境工学専攻環境マネジメント工学講座音環境工学分野を担当された。平成12年停年により退官され、京都大学名誉教授の称号を受けられた。

この間、先生は常に教育に邁進され、多くの優秀な人材を育成されるとともに、騒音の影響・評価・伝搬に関する研究、及び大気汚染の拡散に関する研究等において多くの業績を挙げられた。平成8年には、日本騒音制御工学会より、騒音伝搬に関する研究業績に対し、研究功績賞（論文）を受賞された。

また、日本衛生学会、大気環境学会、日本音響学会、日本騒音制御工学会などにおいて理事、評議員等の要職を歴任され、平成12年より日本騒音制御工学会の会長を務められた。

（大学院工学研究科）

## 山田 肇 名誉教授



山田 肇先生は、1月8日逝去された。享年95。

先生は、昭和6年京都帝国大学医学部医学科を卒業、同大学講師嘱託、助教授を経て同22年教授に就任、薬理学第

2講座を担当された。昭和46年停年により退官され、京都大学名誉教授の称号を受けられた。この間、昭和38年より評議員、昭和40年より同43年まで医学部長として、大学の管理運営に貢献された。

本学退官後は、昭和46年より昭和56年まで兵庫医科大学教授を務められた。

先生は、薬理学、中でも発熱物質および体温調節に関する研究で優れた研究業績を残され、発熱物質の本体とその機序の解明に多大の貢献をされた。

また、日本薬理学会の会長、理事を歴任し同会の運営・発展に貢献された。特に同学会編集主任として学会機関欧文誌である Japanese Journal of Pharmacology の編集を発刊より十数年担当された。これら一連の研究教育活動、学界活動により昭和53年11月勲二等瑞宝章を受けられた。

（大学院医学研究科）

## 医療技術短期大学部の動き

## 平成15年度医療技術短期大学部入学者選抜学力試験の実施

平成15年度入学試験を、次の予定で実施する。

月 日	教 科	時 間
3月1日(土)	国 語	9時～10時30分
	数 学	11時～12時30分
	外 国 語	14時～15時30分
3月2日(日)	理 科	9時～11時

なお、1月24日(金)から1月31日(金)まで入学願書の受付が行われた。

学科別の入学志願者数は、次表のとおりである。

学 科	募集人員	志願者数	倍率	(参考)昨年度		
				募集人員	志願者数	倍率
看 護 学 科	80 <sup>人</sup>	271 <sup>人</sup>	3.4	80 <sup>人</sup>	342 <sup>人</sup>	4.3
衛生技術学科	40	358	9.0	40	297	7.4
理学療法学科	20	183	9.2	20	246	12.3
作業療法学科	20	129	6.5	20	187	9.4
合 計	160	941	5.9	160	1,072	6.7

## 日誌 2002.12.1 ~ 12.31

12月3日 評議会

〃 大韓民国 Dal Ung KIM 慶北大学校学  
長他2名来学、総長他と懇談

6日 人権週間に因む研修会

10日 能楽鑑賞会

13日 情報公開委員会

〃 スーダン共和国 El Zubeir Beshir  
TAHA 科学技術省大臣他1名来学、総長  
他と懇談

16日 外国人研究者との交歓会

16日 アメリカ合衆国 Richard E.NISBETT  
ミシガン大学教授他2名来学、総長他と  
懇談

17日 評議会

18日 国際交流委員会

〃 国際交流会館委員会

20日 大学入試センター試験実施委員会

〃 国立大学の法人化に関する説明会(第2  
回)

## お知らせ

高等教育教授システム開発センター  
第9回大学教育改革フォーラム  
「高等教育における教育改革と経営改善」

日 時：平成15年3月15日（土） 13:30～17:00  
場 所：総合人間学部E号館（吉田キャンパス南）  
主 旨：高等教育改革をとりまく条件に焦点づけて，経営と教育改善の関連について議論をおこないます。

プログラム：挨拶	総 長	長尾 真
問題提起	高等教育教授システム開発センター教授	田中 每実
話題提供	活水女子大学学長	野々村 昇
話題提供	鳥取大学学長	道上 正規
話題提供	関西国際大学人間学部教授	濱名 篤
話題提供	前副学長・経済学研究科教授	赤岡 功

聴 講 料：無料（資料代1,000円）

定 員：500人

問い合わせ先：高等教育教授システム開発センター TEL：753-3087 FAX：753-3045

\* 詳細は <http://www.adm.kyoto-u.ac.jp/highedu/> をご覧ください。

## 第2回大学教育研究集会

日 時：3月15日（土） 9:00～12:10

プログラム：教育評価研究部会 / カリキュラム研究部会 / e-Learning・遠隔教育研究部会 / 授業研究部会  
/ FD研究部会 / 授業公開研究部会

\* 各部会6名ずつの研究発表，総括講演があります。

場所・問い合わせについては，上記のフォーラムと同様

## 編集後記

京大広報編集部会のメンバーは，この3月で2年間の任期を終え，ようやくお役ご免となります。最近では編集会議の行き帰りに，「春よ来い，早く来い...」と口ずさんでは，密かに悦に入っております。（なぜそんなに嬉しいのかな？）この間，何とか無事にやって来れたのは（実を言うと，少しは色々あったけどね），これも運命だと諦めて，時間を割いて協力してくれた同僚の教官たちと，どうせ実務をやらされるのはこっちなのに，という不満を押さえて，我々の方針を具体的に詰めて実現してくれた大学情報課の皆さんに，心からお礼を言います。（我々はこれでお役ご免だけど，あなた方はこれから頑張るね。）

えっ？ 2月号でお別れの挨拶は，ちと早過ぎるんじゃないかって？ いえいえ，来月号の編集後記では，我々の2年間の編集経験で色々と思ったことを持ち寄って，将来の京大広報のあり方や方向について，我々なりの提言を纏め，次の新しい編集部会にバトンタッチして終わりたいと考えています。ですから，ちょっと早いけど，今月号でお別れの挨拶をしちゃおうか，と思った次第なのです。

春よ来い，早く来い。歩き始めた，みいちゃんが...

（齊藤記）